

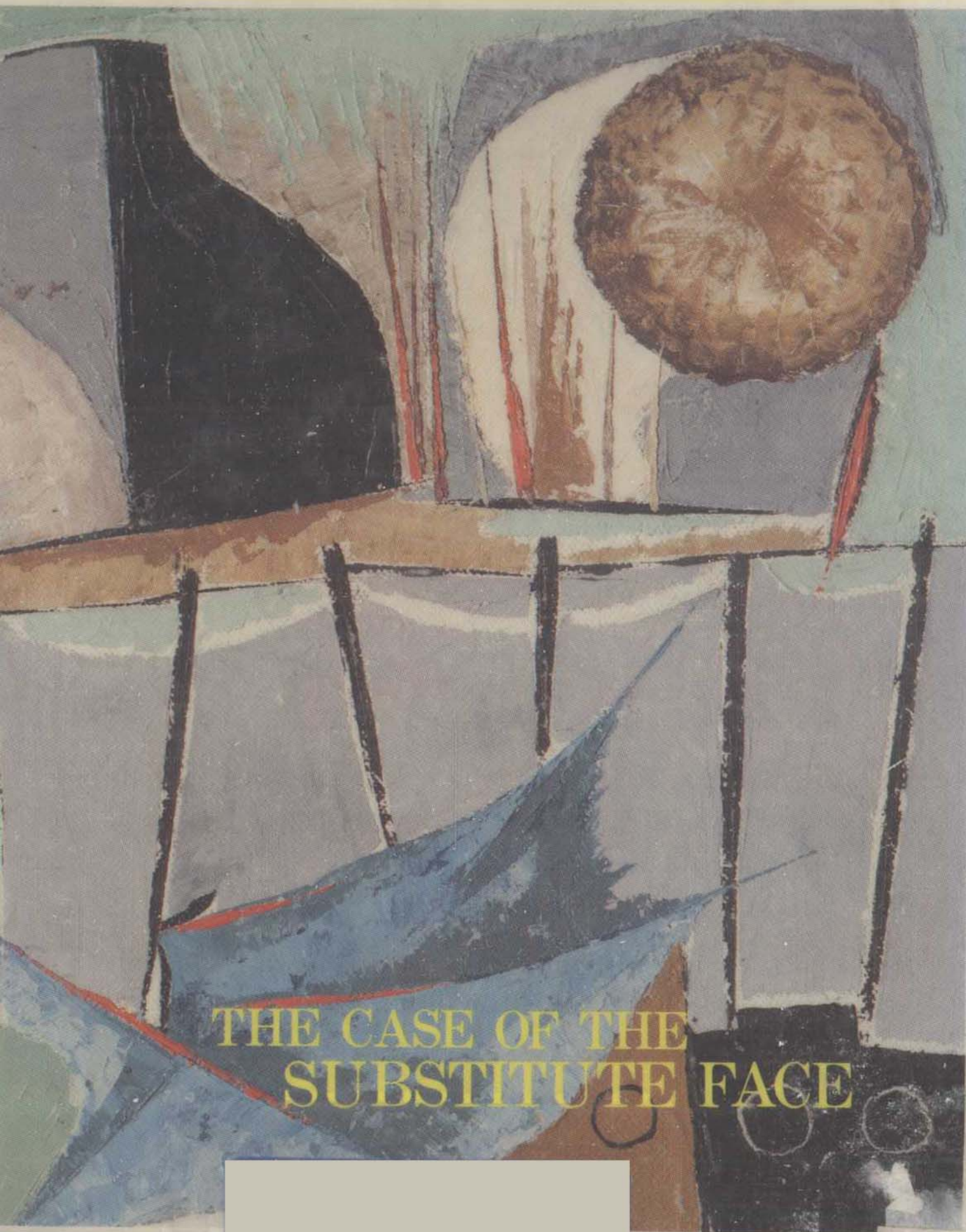
〈ペリイ・メイスン・シリーズ〉

212

掬替えられた顔

E・S・ガードナー

砧 一郎訳



THE CASE OF THE
SUBSTITUTE FACE

A [REDACTED] A
POCKET MYSTERY BOOK.



砧 一郎
きぬた いち ろう

この本の型は、縦18.4センチ、横10.6センチのポケット・ブック版です。

昭和11年北海道大学理学部卒

英米文学翻訳家

主訳書

「そそっかしい小猫」E・S・ガードナー

「ユダの窓」カーター・ディクスン

「弁でもくらえ」A・A・フェア 他

(以上早川書房刊)

検 印
廃 止

〔掏替えられた顔〕

1955年8月15日初版発行 1989年10月31日8版発行

著 者	E・S・ガードナー
訳 者	砧 一 郎
発行者	早 川 浩
印刷所	誠友印刷株式会社
表紙印刷	株式会社TKM
表紙製版	株式会社イッセイ
製本所	株式会社川島製本所

発行所 株式会社 早 川 書 房

東京都千代田区神田多町2ノ2

電話 東京252局3111(大代表)

振替 東京・6-47799

〔乱丁・落丁本は本社またはお買求めの書店にてお取替えいたします〕

ISBN4-15-000212-6 C0297

＜ペリイ・メイスン・シリーズ＞

212

掬替えられた顔

E・S・ガードナー

砧 一郎訳



院图书馆
章

THE CASE OF THE
SUBSTITUTE FACE

POCKET MYSTERY BOOK.

メイスンには、どこにいても事件を招きよせる不思議な能力があるようだ。いましも、デラ・ストリートとともに船のデッキに立ち、遠く去りゆくハワイの灯影を見つめながら名残りを惜しんでいる彼のもとへ、新たな依頼人が訪ねてきたのである。

依頼人は、ニューベリ夫人。夫のカール、娘のベルの三人でハワイの休日を楽しんで帰国するところだった。夫人



E・S・ガードナー

は、突然大金を手に入れたらしい夫を調べてほしいと言ってきたのだった。帳簿係の職を唐突にやめ、逃げるように引越し、その後は身分不相応なハワイ旅行——どこで、どうやってその金を手に入れたか、夫はけっしてしゃべろうとしなかった。

そのうち、夫人の耳に、夫がやめた会社で使いこみがあり、追及がはじまっているという噂がはいってきた。しかもその朝、荷物のなかに入っていたベルの写真が、彼女そっくりの女優の写真にすりかえられているのを発見した。船内の誰かが、ニューベリ一家の身元を確認しようとしている疑いがあった。はたして、夫のカールはほんとうに使いこみをしたのだろうか……？

興味を持ったメイスンは、調査の準備にとりかかった。だがその矢先、嵐の晩に起きた謎めいた出来事はさすがのメイスンの肝も冷やすような、複雑怪奇をきわめる殺人事件の幕明けだった！ シリーズ初期を代表する名作

定価950円(本体922円)

・ミステリ

ERLE STANLEY GARDNER

掬替えられた顔

THE CASE OF
THE SUBSTITUTE FACE

E・S・ガードナー

砧 一郎 訳

A HAYAKAWA
POCKET MYSTERY BOOK

日本語版翻訳権独占
早川書房

© 1955 Hayakawa Publishing, Inc.

THE CASE OF THE
SUBSTITUTE FACE

by

ERLE STANLEY GARDNER

Copyright © 1938 by

ERLE STANLEY GARDNER

Translated by

ICHIRO KINUTA

First published 1955 in Japan by

HAYAKAWA PUBLISHING, INC.

This book is published in Japan by arrangement
with THAYER HOBSON & COMPANY
through TUTTLE-MORI AGENCY INC., TOKYO.

掬
替
え
ら
れ
た
顔

登 場 人 物

- ベリイ・メイスン……………弁護士
テラ・ストリート……………メイスンの秘書
ボール・ドレイク……………私立探偵
ニューベリ夫人……………依頼人
カール・ニューベリ……………その夫、失踪社員
ベル・ニューベリ……………その義理の娘
ロイ・ハンガフォード……………石油王の息子
エヴリン・ホワイティング……………看護婦
ロージャー・カートマン……………首の骨の折れた男
チャールズ・ウィットモア・
 テイル……………プロダクツ・リファイニング
 会社社長
セリンダ・テイル……………その令嬢
カスター・ルーニー……………プロダクツ・リファイニング
 会社監査役
マージョリイ・トレント……………ルーニーの情婦
モーガン・イヴズ……………前科者
ドナルドスン・スカダー……………地方検事
スタートヴァント・ロムリ判事…裁判長

ペリイ・メイスンは、手すりにもたれかかっていた。船と岸壁とはさまれた、インクのように青黒い水のリボンの幅が、だんだんひろがつて行つた。さん橋にむらがつた見物人たちは、手に手に帽子やハンカチーフを振つて、わかれを惜しんだ。しやがれたような汽笛が、騒々しく吠え立てた。スクリューが、海水をかきまわして、一面に白い泡を立てた。それも、やがて静まつた。

急に黙つてしまつた船客たちの耳に、島の女が、やわらかな声でうたう、アロハ・オエの調べがとどいた。

メイスンは、街のともし火のきらめきの中に、次第に小さくなつて行くアロハの塔を、ジッと見まもつた。陸地のざわ

めきが、船尾のかなたに遠くなるにつれて、黒々とした山々の静かな影絵が、星空目がけて、せり上がつて来た。船の横腹をこすつて、うしろへ流れる水の音も、きこえるほどになつた。

秘書のデラ・ストリートが、メイスンの力強い指を、手すりにのせた手の甲のほうから、まるごとグツとにぎりしめた。「わたし、決して忘れなくてよ。雄大で、静寂で、厳肅だわ」

メイスンは、自分のくびにかかつた、赤と白と紫のリボンで結ばれたレイ(花輪)をいじりながら、うなずいた。

「もつと残りたかつた？」

「いいえ——でも、なんだか忘れられないのよ」

「まつたく、すばらしい骨休めだつたね」メイスンの声には、ジッとしていられない気性が、あらわれていた。「しかし、ぼくは、そろそろひと暴れしてやりたいよ。あそこらには——」と、ワイキキ海岸ディグの見当に、大きく手を振つて見せて——「文明というヤツに、喰いものにされはしたものの、まだすつかり亡びてしまつていないものがあるね。みんな親

切だし、氣候は、おだやかで、あたたかだし、気のつかないうちに、ドンドン時間が経つてしまふ。ぼくは、いま、そんな土地をあとにして、都会の咆哮のまつただ中に、もどつて行こうとしているんだ。……ジャンジャンと鳴る電話、ガナリ立てる自動車の警笛、金属的なびびきのやかましい交通信号器のベル、自分では、出まかせをいいながら、ぼくのほうのことは、自分にどこまでも忠実につくしてくれるのが当然と思つてゐる依頼人——ああ、帰り着くのが、待ち切れないよ」

「わかるわ」デラの声には、思いやりがこもつていた。

機関の振動が、大きな船体を、ビリビリと震わせ、船あしは速まつた。二人のくびのまわりのレイの花びらを、熱帯の微風がそよがせた。メイスンは、黒い海岸線を縁どる燈火の列を見ていた視線を、船の胴ばらに沿つて、うしろに流れる泡立つた海水に落した。

下の甲板から、レイがひとつ、ヒョイと飛び出し、まつ黒な海面をバツクに、あざやかな色彩の輪となつて、しばらく宙にたゆたつたかと思ふ間もなく、たちまちバランスを失つ

て、そのまま矢のように、船尾のほうへ落ちて行つた。むかしながらのハワイの習慣に従おうとする船客の投げたレイだつた。

「あの連中は、新参もの、つまり、ハワイ語でいえば、マリヒニスだよ」メイスンの口調には、なが年、人間の本性を、既成事実としてうけ入れることになじんだ人に見られる寛容がうかがわれた。「ああいうレイは、まつ直ぐに、港に流れもどつてしまふんだ。ダイヤモンド岬をまわるまで待つのがホントだよ」

二人は、手すりに両肘をのせて、下の甲板の手すりにもたれてゐる人たちの頭や肩を見おろした。

「そこんどこに、ゆうべ、中華料理店で見かけた二人連れがいるね」

デラ・ストリートは、メイスンの眼の方向をたどつた。「ああ、あの女のひとのほう、わたしと部屋が一しよなのよ。荷物はこびこんだときに、船室にいたわ」

「どういうひと？」

「ベル・ニューベリというのよ。父さんと母さんが、三二一

号室にいるわ」

「かれ氏のほうは？」

「ロイ・アンボイ・ハンガフォード……でも、べつに、かれ氏つてわけでもないのよ」

「冗談じゃない……ゆうべ、あの娘と踊つていたときの眼つきは、ただごとじゃなかったぜ」

「熱帯地方では、男の人が、眼にものをいわせるぐらい、ビツクリするほどあたり前のことだわ」デラ・ストリートは、声を出して笑つた。「ホラ、気がついたでしょう？ まつ白なシャークススキンのドレスを着て、押しつぶされるほど、レイをドッサリかけていた、眼の青い、茶いろの髪をした、背の高い女の子よ——そら、あそここのところに、父さんとならんで立つていた……」

「うん、気がついたよ……で、その女の子が？」

「それが、ハンガフォードと、わけのある仲らしいわ。セリング・デイルといつて、C・ウィットモア・デイルの娘なんだつて。その父さんが、どんな人なのか知らないけど、お大じんぶつて、A甲板の大きな特別室を占領してるのよ」

「なるほど」メイスンは、微笑をうかべた。「君も、ずいぶんほうぼう歩きまわつたもんだね……どうだい、ぼくたちも、レイを投げようか？」

デラ・ストリートはうなずいた。「わたし、船長晩さん会のとくに使うのを、ひとつだけとつとくわ。部屋の給仕さんに頼んで、冷蔵庫に入れといってもらうの」

二人は、とどこおりなく、レイを暗い海に葬る儀式をすませた。メイスンの最後のレイが、くらやみの中に消えて行くとき、デラ・ストリートがたずねた。「ねえ、本国のほうでは、誰もが迷信としか思わないこんなことが、どうして、ここでは、いかにももつともらしく思えるのかしら？」

「それだけ大ぜいの人たちが、信じているからだよ。大ぜいが信じれば、迷信も迷信でなくなつて、具体的な精神力をもつようになるんだ。島の信仰に背いて、災難に見舞われた人たちの物語が権威をもつて語りつがれていることに注意してごらん。タブーをおかしたら、どんな目に会うか、それを身にしみて知つている連中が、いく千人となくいるんだ。そんなムチャをやるものなら、きつとなにかのワザワイがふり

かかつて来るということをし、ずいぶん大ぜいの人たちが、心から信じこんでいるんだからね」

「催眠術にかかったように？」

「そういつていいかもしれない」

「あら、ベルの父さんと母さんが来るわ。きつと近づきになりたいのよ」

メイスンが、ふりかえると、額の高い、灰いろの突きさすような鋭い眼をした、五十五、六の、やせた小がらな男に、眼がとまつた。連れの女のほうは、ずっと若く見えた。まだほつそりと優雅な姿態が失われず、足のはこびも、大きく軽やかだつた。女の濃い茶いろの眼が、メイスンの顔を、興味をひかれたように、ジロジロとさぐり、それから、ヒョイト、デラ・ストリートにうつつた。と、軽く会釈をして、ほお笑んだ。帽子なしの男のほうは、眼を向けもしなかつた。

メイスンは、二人が通りすぎるのを見まもつた。男は、思いをこらしたように、船のかたのまつ暗な夜のトバリをみつめていた。女のほうは、船客たちを、あけすけな眼で、値ぶみするように、ながめまわしていた。

「今の女の人には、会つたことがあるの？」

「あるわ。しばらくだつたけど、あの人たち、わたしの船室に来ていたのよ」

メイスンは、また、下の甲板の二人連れを見おろした。

「あんなのを見ると、セリング・デイルも、大急ぎで、自分の立場をハッキリさせたほうがよさそうだね。さもないと、いつの間にか、かれ氏を横どりされてしまうよ……はてな、あの女の子、どこで見たんだつけな？　どつかで、お目にかつたことがあるんだがなあ」

デラ・ストリートは、笑い出した。「ゆうべも、それをおつしやつたわね。そういわれてみると、わたしも、前にあの人を見たことがあるような気がしたわ。だから、わたし、さつき、そのことを、直にきいて見たのよ」

「ぼくの事務所に来たことがあるのかな？　それとも、ぼくの事件の陪審の中にいたのかな？」

「いいえ。他人のソラ似つてだけのことなのよ。ソラ——」
「わかつた。ウィニ・ジョイスだ、映画女優の！」メイスンは、大きな声を出した。

デラ・ストリートはうなずいた。「もともと似ているところに、ミス・ニューベリつたら、髪のカタチまでまねて、ことさらそれを強調しているのよ。身のこなしも、ちつとは意識して、ウィニ・ジョイスをまねしているようだよ。少しハリウッドにうつつを抜かしているのね」

「うつつを抜かしているのは、誰もかれもさ。ハリウッドそのものまでがね」メイスンは、ニヤリとして見せた。

「じゃあ、わたし、給仕さんをさがして、レイを冷蔵庫に隠れといってもらふことにするわ……また明日の朝ね」

デラ・ストリートは、急ぎ足で立ち去った。残されたメイスンは、手すりぎわに立つたまま、熱帯の生ぬるい夜気のかおりを吸いこみながら、ときをおいてはピカッと光る燈台の閃光をみつめていた。島での最後の一日の活躍や、夜の出帆のゴタゴタや、別離の緊張のためにくたびれはてた船客たちが、めいめいの船室に引つこんでしまったあとの甲板は、ヒツソリと静まりかえり、人かげも見えなかつた。

メイスンは、ふと自分の名を口にした女の声に、クルッとふりかえつた。

「ミスタ・メイスン、わたくし、ミセス・ニューベリでございます。娘が、秘書のかたと、ご一しよの船室なので、先生のごことは、よく存じ上げておりますの。さつきも、この手すりによつていらつしやるのを、通りがかりにお見かけいたしましたわ——わたくし——実は、わたくし、ご相談申し上げたいことがあるんでございますけど」

「仕ごとのほうのことですか？」

ミセス・ニューベリはうなずいた。

メイスンは、冷静な眼で、センサクするように、相手を見た。「どんなことですか？」

「娘のベルのことなんでございます」

メイスンは、微笑をうかべた。「ミセス・ニューベリ、失礼ですが、カンちがいしておいでじゃありませんか？ ぼくは、普通の法律業務は、扱っていないんです。ぼくの専門は、法廷の仕ごとで、それも、ほとんどが、殺人事件なんです。がね。ベルさんが、そんな、ぼくのお手つだいしなきやらんようなことをなすつたとおつしやるのではありますまい」

「どうか、お断りにならないで……」すがりつくようないかただつた。「先生なら、きつと助けていただけるような気がするんでございます。決して、お手間をおとらせするようなことはないと存じますし、ベルにとつては、生活をまるで變えてしまふかもしれないようなことでございますから」

メイスンは、相手の声に、神経性ヒステリのきざしのあるのに、気がついた。「どうぞ、お話し下さい。うかがうだけは、うかがいましょう。意見ぐらいは、申し上げられるでしょう。で、ベルさんが、どうされたんですか？」

「いいえ、あの子は、べつになにもいたしませんわ。わたくしの主人のほうですの」

「なるほど。では、そのベルさんのお父さんは、どんなことを――？」

「ベルの父親ではございませんのよ。ベルは、わたくしの前の夫の娘ですの」

「でも、ニューベリを名のつておいでですね？」弁護士は、合点の行かぬ顔をした。

「いいえ、わたくしどもみんなで、その名を使っています

の」

「わかりませんな」

「こうなんでしょう」ミセス・ニューベリは、早口になつた。「主人のホントの姓は、モーアなんです。つい二ヶ月前までは、わたくしも、ミセス・モーアでございました。それが、主人は、急に姓名を變えてしまいました。それまでのC・ウェイカ・モーアという名をすてて、カール・W・ニューベリになつてしまつたのでございます。それと一しよに、主人は、プロダクツ・リファイニング会社の帳簿係の職も、アッサリとやめました。わたくしもは、追い立てられるように、よその土地にうつり、そこで、ニューベリの名でくらし、それから、ホノルルにわたつて、六週間滞在いたしました。わたくしどもは、主人から、どんな事情があるうとも、決してモーアという名を口にしてはならない、と、きつくいわれていたのでございます」

メイスンの眼には、興味の色があらわれた。「ご主人は、おつとめを、事前通告もなしに、イキナリやめられたんですか？」

「はい、会社には、顔出しもしなかつたのでございます」
「それは変つていますな」メイスンは、どつちつかずの意見をのべた。

女は、そばに身を寄せて来た。片手で、メイスンの手首にぎり、ゆつくりと指に力をこめ、しまいには、関節のまわりの皮膚が白くなるほど、きつくにぎりしめた。「ベルは、なにも感づいてはおりません。あの子は、皮肉な人生観と、感傷とをゴツチャまぜにした、当世風の娘でございます。それまで、一年以上も、あの子は、モーアの名を名のりたがつておりましたの。自分の母親を、人に、ミセス・モーアといつて紹介した上に、カールのことを、自分の義理の父親なのだ、と、説明するのが、メンド臭いというんでございます。ですから、主人が、わたくしどもみんなで、あの子の姓を名のることになつたのだと申しますと、大へんなよろこびようでしたわ」

「お嬢さんは、ご主人とは、うまく行つておられたんですか？」

「そりやあ、もう、とてもよくなつておりますのよ。わた

くし、ときどき、あの子のほうが、わたくしよりも、よつぽどよく主人を理解していると思うことがありますの。主人のカールは、わたくしにとつては、いつもナゾのように、正しいのつかめない人ですわ。ちつとも感情を外にあらわしませんし、ひどく無口なんです。それが、ベルのことになると、あの子の歩く地面までが、拝みたくなるといふうなんでございます。最近まで、主人は、チャンスにめぐまれない生活のことで、グチをこぼすようなことはございませんでした。それが、ブツブツと不平をならべるようになりました。主人には、ベルに、チャンとしたかたがたにめぐり会う機会をつくつてやれるだけのお金を、手に入れることができなかったのでございます。あの子は、主人にしてみれば、あの子に当然と思われするような衣裳も、もつておりませんでした。旅行もできませんでしたし……」

「今は、あなたがた、その旅行をしておられるわけですか」メイスンは、微笑を見せた。

「ええ、そこなんでございますのよ。わたくしども、二ヶ月ばかり前に、急にお金もちになりましたの」

「という、ご主人が、改名されたところですね？」

「はあ」

「どのくらいお金もちになられたんですか？」

「それは、存じませんけど……主人は、胴巻に、現金をいれどもち歩くのでございます。わたくしは、その胴巻の中をのぞいて見たことはありませんが、主人は、ときどき、銀行に出かけて、千ドルのおさつをくずしてもらつておりますわ」

メイスンの手くびをにぎりしめていた手が、神経質にふるえ出していた。女は、早口に、しやべりつづけた。「むろん、わたくしだつて、バカではございません。なにも、三十九年もの間、ムダに生きて来たわけではないのです」

「ご主人に、そういう風変りなことをするわけとか、そのお金を、どうして手に入れたのかとか、そんなことを、あらたまつて訊いてごらんになつたことがありますか？」

「ええ、むろん」

「なんといわれました？」

「賭ごとで当てたのだ、と、そう申しましたわ——富クジですかしら……ですけど、わたくし、そんなことがあつたとは

思いません。だつて、富クジなら当たつた人は、新聞に名前が出るのじやございません？」

メイスンはうなずいた。「偽名を使つて、クジを買う人がないこともありませんがね」

「とにかく、大穴を当てたのだ、と、そう申すのでございますよ。……わたくしどもが、親しく結ばれたのは、神さまのおぼし召しというよりは、むしろ、まわりの事情のせいだつたのだから、もう一度、人生をはじめからやりなおしたい——名前も変えるし、旅行にも出かけて、ベルを、チャンとしたかたがたに会わせるのだ、と、そういうのでございます」

「あなたは、ご主人が、富クジで当てたとおつしやつたことを、信用されなかつたんですね？」

「そのときには、信用いたしましたわ。それが、近ごろになつて、疑いはじめたのでございます。ホノルルに滞在しておりましたときに、ロス・アンジェルスから来た人が、プロダクツ・リファイニング会社が、帳簿の監査に、計理士を頼んだということを話すのを、ふと耳にいたしましたの。わたく

し、心配になつて……どうも、きつとそうだ、というような気がして……そして、そうになると、ベルのことが……」

「なるほど」メイスンは、やさしいいいかたをした。「お嬢さんのことを、うかがいましょう」

「あの子は、まるで、アヒルが、水を見せられたように、この新しい生活にとびこんだのでございます。もともと、苦勞を知らない、生き生きとした、感情に動かされやすい、人づき合いのよい娘ですから、いきなり、かねがねあこがれていたお金もちの旅行者のかたがたと、おつき合いするようになつて、大へんな感激ぶりでした。つい四、五日前に、あの子は、ロイアル・ハワイアンで、ロイ・ハンガフォードさんに、お目にかかりましたの。石油成金でいらつしやる、ピーター・コールマン・ハンガフォードさんのご子息ですわ。それまでは、しよつちゆう、ミス・デイルとばかり、踊つておられるようでしたが、ベルが、お目にかかつてからは、次第に、あの子と一しよの時間のほうがふえてまいりました」

「そのことについて、ミス・デイルは、どういつています」

か？」

「べつに、なにもいつていらつしやいませんわ。とても利口なかたですもの。ベルに、ひどく興味をもっているようです——女のかたには、ときどきございますわね。自分の恋がたきと、とくべつ親しくなるかたが」

「すると、あなたは、ミス・デイルが、お嬢さんのことを、自分の恋がたきと見ている、と、そう思いなんですか？」

「はあ、わたくしは、そう思つておりますわ、ミスタ・メイスン」

「ミス・デイルは、当然、お嬢さんに、家がらとか、住んでいる土地とか、お父さんの職業のことか、そんなことを訊ねておられましようね？」

「ええ。でも、ベルも、抜け目がございせんから、笑つてごまかしておりますのよ。自分のことを、シンデレラなのだから、ま夜なかまでは、浮かれ遊んでも、十二時を打つの一しよに、消えてなくなるんだ、と、そんなふうに申しましてね」

「あの若いハンガフォード君なら、それで通るかもしれませ